

くせものがたり贅注 (追加)

三 沢 醇 治 郎

第二十一段 (長町の貧しき街の様々)

(1)

○昔、男、友どちかい連ねて住吉の郡住吉の里住吉の社に詣でけり。霜月の初め頃にて、夕さり方の空、霜をれて、海吹く風の汐じみていと寒し。生駒山を見れば、冬枯の処々赤はげて、西に入る日の影にあらはにてあいなく、見る見る寒げなり。

〔歌城注〕 真に妙景を写し得たり。

〔贅注〕 ▽霜をれて(盛つていて寒く)。

▽あいなく(あひなくの音便。物のへだてなく、露骨に)。

▽見る見る(見るからに)。

(2)

今宮村を北に横を来れば、長町の南がしらなり。むつかしげなる家ども、ひしひしと立ちならびたる中に、はたごやの所得顔ながら、時ならねば田舎人の宿りも稀々にて、火おこさぬ夏の炭櫃のと、うちながめて過ぐるに、青物果物あきなふ家は、腹饑立て困ひ

て、<sup>たばね</sup>東薪、はかり炭、それこれと賑はし。塩魚何やかや、しひら目黒の切り売り、干鰯のいささか皿に盛りたる、また何とかいふ魚のあぶりもの、鮓の<sup>しび</sup>大魚を忘まはしげに切りさいなみたるに、にしんの舌たるげに煮こごらせし、<sup>もちこし</sup>唐きび餅、<sup>あかひ</sup>赤蒸しの切目高なるにも、大路のつち風やかづくらむ。香の物、茎漬けの匂ひ花やぎたるが中に、芋蒸す湯けぶりぞ暖か気なる。

〔原注〕 むつかしげは「むさき」といふ義なり。

〔原注〕 火おこさぬ夏のすびつの心ちして人もすさめずさまじの世や。

〔贅注〕 ▽今宮村(今は大阪市西成区今宮町)。

▽長町の南がしら(大阪日本橋の南に長町一丁目から九丁目まであり、今の日本橋筋に当る。南がしらは南の入口。長町には当時旅人宿が多かつたといふ)。

▽むつかしげなる(汚なげな)。

▽時ならねば(旅に出る人の少ない寒い時節なので)。

▽火起こさぬ……（この歌は大学頭、高辻長守の詠として鴨長明の無名抄に見え、「すさまじの身や」とある。枕の草子に「すさまじきもの、昼吠ゆる犬、火おこさぬ炭櫃……」）。

▽しひら（写本にしいらとあるのが正しい。魚扁に唇の字、又は鮫魚と書いて「しびら」ともいう。南海や日本海に産する大きき三尺ほどの魚で、猫づら・くまびき・かなやま・ひいを・ひいら・とうやくなどの地方的異名がある）。

▽目黒（「浪花聞書」に「小まぐろ魚なり」なお補説を見よ）。

▽鮫の大魚（まぐろの一種で大きいのは七八尺から一丈位もある。但し関西でいう「しび」は黄はだまぐろのことである）。

▽あかむし（小豆飯の京阪方言）。

▽切目高（おしつけて型に入れて盛った飯を「切り飯」というから、ここは高く盛ったことであろう。石川淳氏は「盛り沢山」と訳している）。

▽つち風（辻風とも考えられるが、写本に土風とあるから、埃をとばす風の義だろう）。

(3)

日は西に沈みはてて、風いとど荒ぶきだち、厚肥あつこえて著たるさへ、夕しめり身にしみて覚ゆ。此ほとりに宿とどろとるとて、あさましげなる

者ども、たち繞きて婦り来るを見れば、老いさらばへる目くら、竹杖の片手には、十一二なる童わらわに引かせて、行く行くうち倒るべく歩み来る。このあたりにては米こめを呼ばねど、声をしあげば聞知りたらむものぞ。拵つらみたるものに、面おもておし包みたるうばらの、手に蕪かぶら葉二株ばかり括り下げて、物得たり顔に行くもあり。

〔贅注〕 ▽あさましげなる者ども（ひどく見すばらしい人ども）。

▽米を呼ばねど（米をよぶは門口にて合力を乞うこと、即ち乞食すること。宿の附近では流石に物乞いのあわれ気な声は出さぬが、もし出したとしたり、きつとわれわれの常に聞きなれた乞食であるに違いない）。

▽うばら（老嫗。補注を看よ）。

(4)

るざり法師の頭髪かしらがみおどろにあひ延びて、つづれの厩うまのひまより、氷れる肌かわのあらはれたるが、何事やらむ、独りごとしつづるるざり行くは、今日の寒さをかこつなるべし。早く宿れるは、一銭が塩、二銭が餅、これかれ求めありく。此のあきなふ家も、ここに年月すみ古りたるは、さるものらいふせう卑しめず、「それ召すか、これぞ良かめる」など、こころよげなり。

〔贅注〕 ▽いふせう卑しめず（いふせくの音便。いやがって馬鹿にせず）。

▽それ石すか……（それを差上げますか。こちらが良いでしよう）。

(5)

此の来たる中に、紺ぞめの尻高くからげ、はりの木柴の脚紳しめはきつつ、真鍮つばの長劔さしこはらしたるが、宿り急ぐに、草子紙の大鳥毛、さびしげに振り担げたるに連れだちて、辻だちの歌舞妓芸者の、紅粉おしろい斑らに化粧ひたる若者と睦まじげに、うち物語りしつつ行くは、あるが中にもいさぎよ気なれど、流石におどふるふ鼻の先、太腰など、鮎色に凍えて寒げなり。また、あやしの男の、目ばかり見えて、手には鳥篋のおしつぶれたるに、朽ちたる簀の子板もち添へて、今宵の焚火の料得たりとや、嬉しげに走り行く。

〔資注〕 ▽はりの木柴（椽の木の皮で染めたもの。はりは椽の古名）。

▽さしこはらし（いかめしく差す）。

▽草子紙の大鳥毛（草子の反古紙で作った大鳥毛。大鳥毛は馬印又は槍の鞘に用い、鷹の羽を栗のいがのようによく作つたもの）。

▽辻だちの……（街頭で歌舞伎の真似を演じて通行人に金を乞うもの。芸者は男の芸人、女の芸人は芸子という）。

▽あるが中にも……（中で一番に小さっぱりとしては

居るが）。

▽おどふるふ（ブルブルと震える）。

▽しび色に凍えて（鮎の肉色は暗赤色なので、凍えた手足の色とよく似て居り、今でも使う形容語である）。

▽目ばかり見えて（手拭か頭巾をかぶって目ばかり出して）。

▽朽ちたる簀の子板（腐つた椽板。ここは恐らくどぶ板であろうか）。

(6)

辻君五六人、低き足駄の音こぼこぼと響かせ、髪はぬれぬれとあげて、白きもの襟に移らふまで、きはきはしく擦り立て、色合確かならぬもの、引重ね着て、からからと物高らかに言ひつつ、北さまに歩み行く。更に更に情しくこそあらね、彼もまた愛しう言ひ交したる男もあるべし。また親男のために、わが身はあるものともせず、宵々出で立つもありとや。あはれの操や、わりなのまことやと、うち眺めらるる。

〔資注〕 ▽辻君（往來の辻に立って春を売る女）。

▽髪はぬれぬれと（髪は艶々とあけて。ぬれぬれは油のために滑らかな形容。春雨物語に「この血の帳のかたびらに飛び走りそそぎて、ぬれぬれと乾かず」  
Ⅱ血かたびらⅡ）。

▽更に更に情しくこそあらね（微塵も色っぽい感じを

もっていないけれど)。

▽我身はあるものともせず(我身を投げ出して)。

▽あはれの操や(良人を救わんがために貞操を売る、何という悲しい貞操であろう)。

▽わりなの誠や(誠を尽そうがために女の誇を塵の如くに捨てねばならない、何という矛盾した誠であろう)。

(7)

やうやう道頓堀に来れば、たちまち異国(こくご)にいたりしかと覚ゆ。夜芝居の設け明日の夜よりと、櫓幕ひらひらとひるがへれる、此の吹く風は、さきさきにはあらぬにやと、思ふも移りやすの人心や。

〔歌城注〕 此の一段の写出しは縮心縮口、われ読みて舞はんと欲す。

〔贅注〕

▽道頓堀(大阪市の中央にある道頓堀川に添うた街の名。日本橋南詰から戎橋南詰に至る数町の間で、附近は劇場が立ちならんで股盛を極めた。道頓堀川は昔は小さい川であったのを、元和年間安井道頓がほりひろげて両側に家を建てた)。

▽異国に至りしかと(あまり繁華なので今までの貧民街にくらべて、全然別な国に来たかと疑われる)。

▽やぐら幕(芝居や角力小屋の屋根の上に櫓を組んで、人寄せの太鼓をたたく。その櫓の周囲に張った幕。芝居では役者の名や狂言の題を染め抜いた)。

▽さきさきにはあらぬにやと(先刻通つて来た長町に吹くのと同じ風なのだろうか)。

▽うつりやすの人心や(人の心がまわりの様子によって喜怒哀楽の感情に忽ち変化を生じ易い、はかない人心よ)。

《補説》

①評||この段は、作者自身の目にした長町貧民街の写生文である。

時もちようと真冬の寒空に、最下層の生活にあえいでいる人々の様子が、よく描き出されている。いろいろな人物が点ぜられた中に、「あやしの男の目ばかり見えて手にて鳥籠のおしつおれたるに朽ちたる簀の子板もち添へて、今宵の焚火のしる得たりとや嬉しげに走り行く」のが第一に出色だと思ふ。最後に道頓堀の夜芝居をもつて来たのは白黒の対照が鮮かで、感銘を一層深いものになっている。世に有数の名文として推重せられているのは当然であらう。

②本段の查出しは例によって伊勢物語の筆法をかりている。即ち、

○昔男、逍遙しに思ふどちかひ連ねて、和泉国へ二月ばかりにいにけり。(伊勢物語第六十六段)

○津の国住吉の郡すみよしの里、住吉の浜を行くに、いと面白かりければ、おり居つつ行く。(第六十七段)

③目黒については、西鶴の世間胸算用、巻一「長刀は昔の鞘」ところに歳暮の贈物として「家主殿へ目黒一本」と見える。「くせものがたり」に附した元幹という人の注には「江戸にいふメジカ

にて小さき松魚かつおなり」とあるけれども、

「和漢三才図会」目黒メグロ、鮪メサシの三尺以下のもの。

「俚言集覽、増補」目めぐろ、大阪詞にてまぐる魚をいふ。

「大言海」めぐろ、鮪の一種——中なるを叔鮪、俗にめぐろと

いふ。

とあるのを採った。

④うばらについては「人倫訓蒙図彙」に、

女の物貰ひ也。年は若けれども自ら姥等うばらといふ。下京は五日六日の頃も出る也。赤前垂に手拭かづき、いかきを手に持ちて「うばら祝ひませう」と幾人も一連に口々にわめきて門口をめぐる也。

とあって、手拭で顔を包んだ一種の女乞食である。ただし、乞食うばらの出るのは師走に入ってからで、本文の霜月初めでは季節が早過ぎるのと、作者秋成が、他の場所で「うばら」という語を使用した例を見ると、大抵は単なる老婆の意に用いて居るので、恐らくこの文章の「うばら」も女乞食の通称ではなく、単なる老婆の意ではあるまいか。手近な所から使用例を挙げて見ると、

○翁うばらとても、さる方に一度まゐりては……（本書の第二

段）

○少しよろしき家なるは、刀目・うばら・小姫らが大事と運びつれて、我が頼む人に具へて帰る。（文反古）

○何やくれや買調へていぬうばら嫁娘、かろげなるものを頭にかづきつれ（北野加茂に詣づる記）。

○まめ心なるうばら、娘と名づくる由ある尼（麻知文）。

○寛政丁巳の冬十二月十五日といふ日、我うばらの尼、とみの病して空しくなりぬ。（麻知文）

○うばら心の長物語をつづしり出でたるなりき。（水やり花）

○誰ならん、かしらもたげて見れば、この三年が程我をいたはりかづきしうばら也。（よもつ文）

これらの例は皆老婆の意で、多くは老婆の単数をあらわし、「ら」は全く意味がないか又は一種の卑称・謙称を示す接尾語である。そこから考えて、どうかすると秋成という人は、「うばら」という語が一種の女乞食の場合に使われることに気がつかなかったのではなからうか。この事は、もっと広く秋成の使用例を展してから後に判断すべき事柄だが、今、仮りに一言を加えておく。

（附記）

初めの項及び前頁に掲げた「歌城注」というのは旗本の上で宜長の門に学んだ小林歌城の附した注で、近古文芸温知叢書第四編に収められてゐる。